

まいDO!



大阪よ、どこへ行く。

大阪よ、どこへ行く。
 やさしゅうていじわるなまち。
 でしゃばりでひっこみじあんのまち。
 厳しい差別と熱い人権のまち。
 ひと旗あげに来た人が、
 夢叶わずとも住めるまち。
 情がしがらむ人間のまち。
 なんや最近パッとせん。
 「グレートリセット」でつぶしてまおか?
 ほんまにそれでええのんか?
 東アジアの孤島の西の、
 沖積平野に生まれた都市よ、どこへ行く。
 (ポストターの挿入文)

こんなポスターで大会へお誘い

大阪の至る所に存在する。一見、統一感のない街に見えるが、その「混在」の中に大阪のエネルギーを生む源がある。しかし、「なんや最近パッとせん」といわれている。その大阪の現実を体感してほしい。

元気はつらつ単組めぐり……豊中市労連

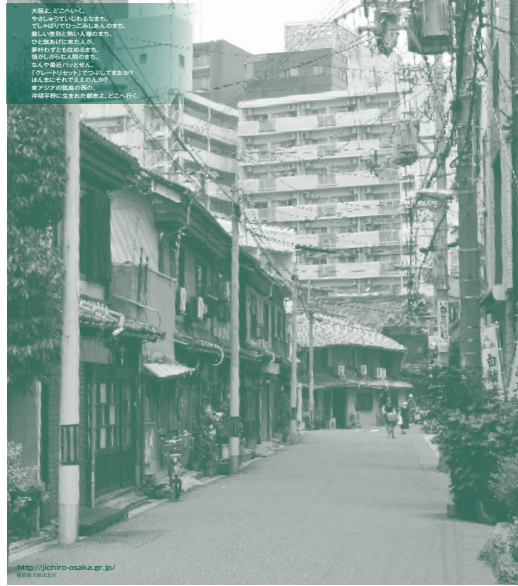
豊中市労連の非常勤組織化の取り組みと「ガイドブック」

まよって
まよって
まよって

出会い、語り、なにわらい

第86回自治労定期大会大阪大会

●8月26日(月)～28日(水)
●大阪府ホール



▲大会ポスターの写眞はモノトーン、その光と影が大阪の立体感と質感を写し留めている。

手前には古い民家、奥にはビル群が立ちはだかる。撮影場所は大阪市北区。すぐ隣は大阪駅のあるターミナル「梅田」だ。こういった風景は、

非常に見やすいと好評を博している「臨時・非常勤職員のガイドブックー2013年度版」(頒価500円)。豊中市労連が発行したこの冊子には一般職非常勤職員の給与表や休暇制度などが詳しく解説されています。

豊中市は、大阪府の北西に位置する人口約39万人の中核都市。ここで活動する市労連は、これまで国保推進員労組を皮切りに、公共サービスで働く非常勤職員、外郭団体、民間委託とさまざまな仲間を組織化してきました。ちなみに自治労臨時・非常勤等全国協議会の高橋英津子議長(府本部副委員長)は、豊中市放課後子どもクラブ指導員労組の出身です。

この間、市労連は任期付短時間職

員の雇用安定、指定管理者制度の見直し、入札改革などの公共サービス課題にも取り組んできました。そし



「いいね、これ」とあいはらさんおすめめのガイドブックを手にする高橋府本部副委員長。問い合わせは豊中市労連まで(06-6242-2230)

て今年4月には、特別非常勤職員の中から労働者性の認められる約1500人を地公法17条の「一般非常勤職員」に移行させ、任用根拠の明確化と勤務条件の改善も行いました。

ガイドブックはそんな活動推進の重要なアイテムです。

ほんまかいな大阪

大阪市内を流れる安治川に、此花区西九条と西区九条を結ぶ川底トンネルが開通したのは1944(昭和19)年9月のことだ。全長約817m。日本初の沈埋工法(コンクリート製の筒を沈

めて川底で接続する工法)で建設され、地上とトンネルはエレベーターと階段で結ばれた。現在は歩行者・自転車用通路のみだが、以前は自動車用の通路もあった(1977年閉鎖)。

かつて兩岸を結んでいたのは源兵衛渡をはじめとした四つの渡船。だがその運輸量には限界があった。また舟運の重要航路

だったこの川は、行き交う船舶の高さの関係で橋を架けるのも



困難。そこで計画・建設されたのがこの川底トンネルだ。

安治川トンネルの現在の利用

川の底にも人情が通う、安治川トンネル

者はもっぱら地域住民。幅約2mの通路では、毎日「おはようさん」と「こんにちは」の声が交差する。人と人のふれあいが川の底で響き合う。

朝夕はすれちがうのも苦勞するほどのラッシュ。トンネルは、地域の貴重な交流通路だ。

大阪は 無緑に いかに 緑が いこう

大阪人の緑への意識はそれほど低いとは思えない。昔から家の軒先には所狭しと鉢植えが並び、水遣りにいそむ姿が普通にあった。では街全体はどうだろう。大阪の緑化事情をひもといた。

化推進をスタートしたのは1964（昭和39）年のこと。環境問題が注目を集めるずっと以前のことだった。

都心のオアシス誕生に 一役買った市民の力

真っ先に取り組んだのが大阪城公園の整備だった。候補はかつて陸軍砲兵工廠として使用されていた広大な土地。フランスのブローニュの森公園やシカゴの森林公園を念頭に市民の寄付も募って植樹を開始、1969（昭和44）年には、市民の森、記念樹の森、太陽の広場で構成される森



●桜の季節にオフィス街の花見客でにぎわう朝（うつぼ）公園。戦後の一時期、東西に細長い敷地は米軍の常用飛行場として使用されていた。

林公園が完成した。そして長居公園の「郷土の森」。地方から中卒者の集団就職が毎年2

万人ともいわれる時代、故郷から遠く離れて暮らす青少年たちに郷里の野山を感じられる場所を、との思いからこの計画は始まった。地方から



大阪にやってきた青少年たちが携えた全国各地の苗木を植樹し、1968（昭和43）年に完成。青少年はもとより市民に愛される森となった。

緑化の道はまだ続く 将来見据えた共同作業を

まだ大阪の緑化推進は道半ばだ。気候変動やヒートアイランド現象など環境問題は今や地球レベルとなった。公園整備に屋上緑化、グリーンウォールなど官民住が一体となった活動はもちろん、地域から家庭から、世代を超えた共同作業で「緑」を街中に広げたい。

▲長居公園の「郷土の森」には、エゾマツにフエックス、オリーブと各地の樹木はもちろん、パリのマロニエやドイツの菩提樹もある。（大阪市東住吉区）

100年かけて街に緑を 政策となった緑化運動

大阪は緑が少ない。淀川流域に形成された沖積平野のためだとか、市街化が早くから進んだせいだとか、理由はさまざま。だが、過密都市の体質を改善し、街に潤いを与える「緑化」は必要不可欠だった。

そこにいち早く気付き重要政策として取り上げたのが中馬馨市長（1963～71年在任）だ。中央公会堂で開かれた大阪市緑化推進大会で「緑化百年宣言」を高々と掲げ、緑



まばらだった木々も生い茂り、まさに都心の一大オアシス。森林公園には野鳥が集い、四季を通じて市民の憩いの場となっている。



写真A 整備が開始されたころの大阪城「森林公園」。ここは、かつて大阪砲兵工廠の軍用地だった。――「写真で見る大阪市100年」より